



東日本大震災に係る教育関連記録集

(平成24年1月27日現在)

東松島市立野蒜小学校

1 はじめに

3月11日の東日本大震災から10カ月が経過しているが、毎月11日を迎える度に3月11日のことが思い出される。そして、時の経過とともに様々な思いが巡り、悲しみが深くなりつらさが募ってくるが、亡くなった児童のことを毎日思い、前を向いて歩んでいる。

野蒜地区や東松島市は復旧がなされ、復興を目指して変容しているものの、未だに3月11日のまま止まっている部分もみられ、被害の大きさをまざまざと突きつけられている。

その中で野蒜小学校は、これまでに日本及び海外の多くの方々から物心両面でたくさんのご支援をいただいて児童や教職員が保護者とともに一歩ずつ一歩ずつ前に進んでいるところである。

3月11日に多くの尊い命が亡くなり避難所でもあった野蒜小学校の記録については、生かされた者として、また校長としてまとめ、整理して、今年度以降の野蒜小学校の防災計画に取り入れ、さらに東松島市の防災計画へも生かしていただくように提言していく責務があると強く感じて行動している。さらに、同じことが二度と繰り返されてはならない、私たちが経験したことを様々な取り組みの中で伝え、生かしていかなければならないという思いでこれまで取り組んできている。

しかし、被災があまりにも大きく、抱えている課題も多いため職員は、公私ともに心にじっくり向き合える状況に至らず、まだ十分に整理ができていないため、現時点での記録の概要となる。大震災により児童が体験したことや置かれている状況は一人一人異なり、簡単に言葉で表すことのできないものである。常に児童の心に寄り添うことを最優先にしてきたが、ここでは、大震災の被災状況と4月21日に東松島市役所鳴瀬総合庁舎の一部を間借りして学校を再開し取り組んでいる一端をまとめる。

2 野蒜小学校の被災状況

- (1) 208名在籍中児童9名が下校中または下校後、家族等と避難中に津波に襲われ死亡したと推測される。
- (2) 校舎は地震と2.9mの津波と車やがれきで1階が全て破壊され、重要書類やデータ等も流された。使用不可の状況となった。
- (3) 体育館は、2.9mの津波により1階アリーナが破壊され、野蒜小学校の児童、教職員、地域の避難者、その他の避難者が津波に襲われた。津波や低体温症等により亡くなった方が、十数人いた。その後、地区の遺体安置所となり、現在も遺族にとり特別な思いの場所となっている。
- (4) 附属施設や倉庫はすべて津波により破壊され、使用ができない状況となった。
- (5) 校庭の物品や樹木、庭、花壇もほとんど津波により破壊され、根こそぎ流され、石碑も倒された。校地は避難者の車やがれきで埋め尽くされた。
- (6) 学区は、9割近くの地域が津波により家の土台ごと流され、堤防や橋公共施設、道路等すべてが壊滅状態となり、ライフラインや様々な機能も停止したので、ほとんどの児童や保護者、教職員は、避難所や親戚の家に避難した。住居が確保できないことから約50名が転出した。
- (7) 保護者や兄弟、祖父母等児童の身内が津波によりたくさん犠牲になり、地域で教育活動を支えていただいた方も数多く犠牲になった。

3 3月11日以降の野蒜小学校と児童たち

(1) 3月11日(金)の概要

- 5校時限で児童は下校していたが、5、6年の高学年は委員会活動のため一部残って活動をしていた。校庭では、下校の途中の児童や遊んでいた児童もおり、校地内には約70名がいた。
- 職員が1階、2階、3階の教室、校庭へと児童の安否確認、避難の確認のためにそれぞれ走り、パニックになっている児童を落ち着かせ、安心させるように声をかけ続けた。
- 全体指揮を体育館で校長が行い、教職員は、児童管理・保護者への引き渡しをしながら帰宅しない特別支援学級児童の捜索、駐車場の誘導、外部との情報取得、避難者の

救護、避難所の設営・運営にあたらざるを得ない緊迫した状況であった。体育館には続々と避難者が来る中で対応する教職員の姿や行動を見ていて、6年生の児童たちが自主的に体育館の中の避難者に声をかけ始めた。

- 体育館、校庭、校舎で避難者が津波に襲われた後、22時頃に水深40cmくらいになり、がれきをかき分け歩くスペースを確保できたことから体育館の避難者が順次校舎へ移動し、最後に教職員が移動したのが24時であった。

(2) 第一次避難所としての野蒜小学校、児童の安否確認状況

- 校舎へ移動した避難者は、約340人であった。校舎へ直接避難した避難者は約110名であり、夜中の12時過ぎから野蒜小学校は、約450名の避難者を受け入れる避難所となった。

- 児童たちは、体育館で津波から避難したり、襲われたり、その惨状を見ている。さらに、体育館で孤立状態の中の余震と不安とで最初は悲鳴が上がっていたが、声かけや野蒜小学校の6年生の「野蒜小、ファイト！」の声で体育館の中は落ち着いてきた。しかし、体育館の中で津波に襲われ亡くなった方や助かったものの寒さのため低体温症等で亡くなられた方があり、児童たちは日が暮れていく中でその様子を見ていたので、校舎へ戻ったときに児童たちの顔から表情が無くなっていた。

- 教職員は、3月15日までほとんど全員泊まり込み、毎日、避難所の手伝いとさまざまな避難所を巡り、多くの保護者や地域の方から情報を集め児童の安否確認を行った。安否確認を行っていく中で、児童たちは様々な状況の中で避難したり、津波に襲われながらも自衛隊や消防署員、消防団、地域の方に間一髪で救助されたことを知った。児童たちの救助された状況や避難状況それぞれに過酷で児童たちは、余震に怯え、一人になったりすることや親から離れることを大変不安に思っていた。家庭では幼児返りの様子も見られたと聞いた。

(3) 第2次避難として鳴瀬第一中学校へ移動

- 3月15日、地域の住宅が津波により破壊され、家族の遺体を安置する場所がないために連日、遺体が体育館へ運ばれる様子を見たり避難者は目にする状況が続き、児童の心と余震による校舎の危険状況、津波による階上への避難と解除が繰り返され大変心配された。第二次避難として野蒜小学校から鳴瀬第一中学校へ移動をお願いし、阿部市長さん、木村教育長さんの多大なご理解と即断、さまざまな方の協力をいただいて短時間で移動完了となった。

- 教職員は、3交代制で避難所に泊まり込み、毎日避難所や個人の家で避難している児童の様子を確認しながら未確認者の情報を聞いて回った。

- 3月末からは、避難所巡回の折りに児童の様子を確認しながら児童たちと遊ぶように

し、心に寄り添ってさまざまな不安を和らげるようにした。

(4) 平成22年度卒業式、修了式、離任式

○平成23年3月28日(月)に鳴瀬第一中学校の体育館で平成22年度の卒業式、修了式、離任式を午前中に全て行った。避難所や親戚の家に身を寄せ、3月11日以来休校となり、離れ離れになっていた児童や保護者が初めて顔を合わせたので、安心感やうれしさで中学校の体育館を借用してではあったが児童の明るい声が響き、学校の存在意義を改めて感じた。そして、教師は児童がいることによって元気になり、やりがいを持てることを実感した。

4 東松島市役所鳴瀬総合庁舎を間借りして野蒜小学校の教育活動をスタート

(1) 第2次避難所の鳴瀬第一中学校から東松島市役所鳴瀬総合庁舎へ移動

○野蒜小学校校舎、体育館は使用できずに、授業が再開できないということで、他の学校との関わりから東松島市役所鳴瀬総合庁舎の2階と3階の一部を校舎として借用することになった。学校ではない施設であるが、児童の受け入れ態勢を早く作ることができ、新年度の教育活動の準備を行うことができた。

(2) 学校の状況

○校舎は、東松島市役所鳴瀬総合庁舎(3学期から仮設校舎)、体育館は、小野地区体育館(2学期から利用)、校庭は、近隣のディケアセンター「はまなすの里」脇の土地(5月に整備後使用)、プールは、東松島市立矢本西小学校のプール(3回)を借用して教育活動を行っている。



○通学は、東松島市がチャーターしているスクールバスを利用している。(4月は避難所の場所から7コースであったが、仮設住宅への移動によりピストン輸送も含めて5コースとなっている。)

○東松島市役所鳴瀬総合庁舎の機能と学校の機能は、異なるが、借用できた場所が限られていたのでベストを目指しながら限られた中でベターの選択を行った。1年生から6年生までの教室とした場所の大きさは全て異なる。4年生から6年生は1つの会議場を3つの教室に仕切って使用した。4年生と5年生の教室を分ける可動式の間仕切りを開くと集会スペースにすることができ、小野市民センターの体育館が使用できるまでは、始業式、終業式や集会等を行う場所としての機能を持たせ活用した。

教室として机といす、教卓は準備していただいたが、黒板は移動黒板（ホワイトボード）で板書の工夫を行った。下駄箱やロッカーなど校舎や教室に当たり前に設置されているものがない状態なので、1学期は、ブルーシートを下駄箱とし、長机や台の上をロッカーとしていた。2学期から福岡県の大川家具工業会等の皆様から無垢の木で下駄箱とロッカーを作っていただき寄贈された。木の香りとぬくもりが心を和らげたこの下駄箱とロッカーは可動式なので仮設校舎でも使用させていただいている。その他の備品や教材等は、個人や団体からの支援をいただいて整備することができた。また、職員室は、階段式で対面式の議場のため、対話がしにくい作りであった。トイレ、水飲み場の数が少なく、毎日水筒とおしぼりを持参した。

特に、女子用トイレの数が少ないため、男子用トイレを使用する時間を設定した。廊下は窓がないため光が少なく幅も狭いので、廊下の歩行には注意を行った。特別教室（理科室、家庭科室、パソコン室、図書室、相談室）がなく全て教室で行った。

（3）東松島市役所鳴瀬総合庁舎と学校の機能の違いを職員の英知でカバー

- 教室、廊下、階段踊り場の掲示できるスペースを十分に生かした掲示計画を立てて掲示物で明るく、目標を明確にした掲示物を作成し、掲示した。月ごとに変化させたり活動ごとに変化させて、ねらいを達成させた。
- 教育活動全般については、安全を第一として「できないこと」と「できること」など条件を考えて、困難な厳しい状況であるものの児童たちのために常に教職員が共通理解と共通行動で対応している。

（4）児童の実態

- 全校児童数は、163名、本年度211名の在籍予定であったが被災により約50名が転出した。
- 大震災で家庭環境が大きく変化した児童が多く、9割以上が家を無くし被災している。さらに、親、兄弟、祖父母、叔父叔母等身内を亡くした児童がおり、特に心のケアのための日常の観察や関わりを大切にしている。
- 児童は、互いの状況を理解しつつ、多くの方々の支援をいただいて明るく、元気に助け合って学校生活を送っている。避難所での生活が長かったので、厳しい条件の中でも互いを思いやり、高学年が低学年の面倒をよく見ているが、地震と津波については恐怖心が大きく、反応も過敏である。

（5）学校経営方針

以上の実態から学校経営方針、スローガンを下記のとおり設定して教育活動を行っている。

- ①教職員の創意・工夫と協働により体・徳・知の調和と児童の個性・能力を伸ばす教育

諸活動の展開を目指し、魅力があり、安全・安心な学校づくりに努める。

- 東日本大震災により物心両面で大きく被災している児童が多く、学校全体として児童の心のケアを継続して行う実態があることからカリキュラムを再編し、1年間教職員の研修を深めながら教育活動に取り組む。(校内研究として研修と活動の検証)
- 児童一人一人の個性・能力を伸ばしながら体・徳・知の調和のとれたいきいきとした教育諸活動の展開を目指す。(具体的な手立ての工夫)
- 保護者及び地域住民と心を通わせ、絆を大切にしながら、その教育力を教育諸活動に活用する。(小野地区、支援ボランティア等も含む)
- 安全を常に意識して、児童が安心して生活できる環境づくりをする。(避難訓練とマニュアルの改善)
- 教職員のコミュニケーションを大切にするとともに謙虚な気持ちで互いに学び合い、助け合いながら、明るい職場づくりを心がける。(思いやりと切磋琢磨)

②スローガン

- 学校営方針を推進していくために学校(児童・教職員)、家庭、地域にわかりやすい内容と目標行動となるものをスローガンとして掲げて実践している。
 - ・その1「あいさつで明るく、みんなで助け合う野蒜小学校」
 - ・その2「プロとして学び、視点を広げる教職員」

(6) 校内研究

心のケアを柱とした校内研究では、次の主題、副題、目指す児童像の実現のために取り組んでいる。研究の詳細は省略する。

①主題

『互いを認め、共に手を取り合ってたくましく生きる児童の育成』
～心を育む行事「レインボータイム」の実践を通して～

②目指す児童像

未来へ向けて共に力強く生きていこうとする児童



(7) 平成23年度の始業式、入学式

○平成23年4月21日(木)に東松島市役所鳴瀬総合庁舎の4、5年教室をあわせて始業式を行い、1年生教室で入学式を行った。厳しい環境の中ながら、心は一つとなっていた。生かされた者として、目の前にいる児童たちに現実を見つめさせながらも希望と人の心をしっかり伝えたいという強い思いで話をした。

- 心のケアを1年間の教育活動の柱にして取り組んでいる。
- 日本国中、海外からたくさんの物心両面の支援をいただき、その心に強く励まされ、元気をもらい、笑顔になり、助け合って前を向いて少しずつ歩けるようになった。

(8) 1学期の終業式

- みんなでももに分け合い、助け合い、楽しく過ごすように努め、児童たちから不安が少しずつ消え、安心感が感じられるようになった。七夕の短冊に津波被害による自分の思いを表わすようになった。
- 日本国中、海外からたくさんの支援を継続していただいているので、できる限りボランティアの皆様との顔の見える関わりを大切にし、その心をしっかり受け止めるようにしてきた。
いつの日か児童たちが成長した後、その心をさまざまな形で次につなげてほしいと願っている。

(9) 2学期

- 8月22日から2学期がスタートして児童たちは、夏休みのプールもなくこれまでとは異なる夏休みだったものの、それぞれに支援をもらいながらそれなりに思い出をつくることができたようだった。体も成長し、心も表情から、現実を受け入れ一つ成長したように感じている。

(10) 3学期は仮設校舎でスタート

- 1月5日から3学期が仮設校舎でスタートした。新しい年を迎え、新しい場所での再スタートである。これまでお世話になった東松島市役所鳴瀬総合庁舎から自分たちのいすを運び、その他の物品については、保護者や東松島市当局、教育委員会、ボラン



ティアの皆様にご協力をいただいた。心を込めて東松島市鳴瀬総合庁舎の清掃をして、所長さんをはじめ温かく見守り、お世話になった皆様にあいさつをした。児童・教職員にとって9ヵ月間、野蒜小学校の教育活動を支えた大切な場所である。

5 おわりに

2学期になり余震も少なくなり、6年生の修学旅行、5年生の蔵王自然教室、4年生の

ふるさと学習，1年生～4年生の秋の遠足，学芸会それぞれに児童が目標をしっかりと持って臨み，充実して活動できたことが大きな自信につながっている。

3学期になって余震が続くものの教職員，児童，保護者がともに地震や津波に関する危機意識をもって日々生活を行っており，さまざまな想定避難訓練を行う度に実のあるものとするために柔軟に改善を図っている。

学校の課題としては，現在4点があげられる。

- 震災による児童，教職員，保護者の心のケアについては現在できる限りの対応をしているので大きく問題が顕在化していないが，潜在しているものは大きく，深いものがあるので今後も時間をかけて継続的に心のケアを行って行く必要がある。
- 仮校舎，仮設校舎等の学校教育環境が十分ではないので他の教育施設や教育機関との連携を模索し厳しい教育環境の中でも学校教育目標を具現化して目指す児童像の具現化を図る必要がある。
- 避難所から仮設住宅や近隣の地区や近隣の市町村のアパートに移った児童が多いものの学区内には住むことが厳しいので学区外からスクールバスや保護者の送迎で通学している児童が多数である。
- 学区が固定していないので，家庭への情報発信と家庭との連携をより一層図り，保護者の心のケアも行いながら家庭の教育力を高めていかなければならない。

ボランティアの皆様には継続して関わっていただいていることで信頼関係も構築され，児童たちには深い悲しみや厳しい現実はあるものの「一人ではない。」「夢や希望を持って前を向いて歩いてみよう。」という気持ちが育っているように感じている。これまで支援や応援をいただいていた児童たちが，徐々に今，自分たちができることを精一杯に行い，さらにはその思いを発信しようとしている。保護者もふるさとへの思いを再確認し，復興の力としている。御礼や感謝の気持ちをまだお届けしていない方々もたくさんあるが，ご縁があって絆が結ばれたすべての皆様に感謝申し上げます。